

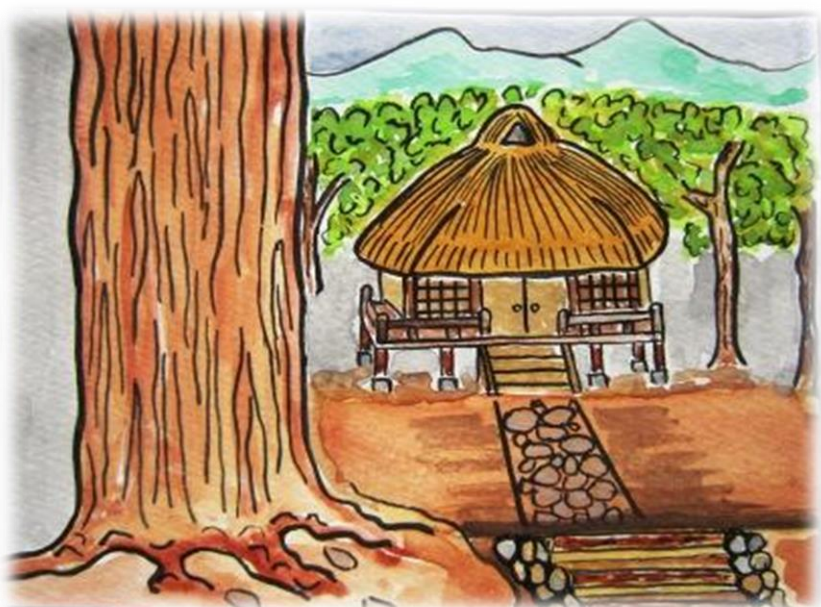
てらとこ かね つぼ はなし

寺床の金ん壺のお話

くらたけさん きたがわちゆうふく てらとこ い ちめい
倉岳山の北側中腹に寺床と言う地名があります。

ちか いま おお いっほんすぎ どうまわ やく
その近くには今も大きな一本杉(胴回り約5m)が
残っています。

さんかくがうきまつ おも いっけん あん てら
そばには、山岳仏教と思われる一軒の庵(お寺)があり
ひとり ぼろ じまきつ
一人のお坊さんが修業をしていました。



お坊さんは村人の悩みや病気のことなど色々なこととの相談に乗ってくれて
いました。村人は、野菜やお金を持ってお参りをしていました。

そんなある時、村里に

「寺床には“金ん壺”が隠してあつとてばい。」

と言ううわさが流れました。これを聞いた村里に住んでいた

好奇心の強い若者助ノ十と安衛門は

「“金ん壺”を取りに行こう。」

と話し合い、ある日、寺床目指して登って行きました。

荒平の入口、山ん神様の大カズラのそばまで来ると腹が減り、



腰こしを下おろして休やすんでいました。

その時とき、山やまん神かみ様さまの上うえにいた野の狐ぎつね使つかいの祈き禱とう師しが

「もう暗くらかもね、一服いっぷくしてお茶ちやどん飲のんで行いきなつせ。」

と誘さそいました。

疲つかれていた助すけノ十じゅうと安やす衛え門もんは言いわれるがままに

「いっちょよ、ぐつつんなって行いこうかい。」

と祈き禱とう師しの家いえに寄より、ゆっくりお茶ちやを飲のんだりダゴをいただいたり
していました。

祈き禱とう師しの老ろう婆ばが、

「これは山やま神様かみさまにあげてあった“ハタリ酒”さけばえ」

と竹の筒たけに入れた甘酒あまざけを二人ふたりに差し出さしました。

しばらくすると二人ふたりはなんだか眠ねむくなり、

そのままそこねこに寝込ねこんでしまい一晩泊ひとばんとまってしまいました。

翌朝よくあさはや早く助すけノ十すけのじゅうと安衛門やすえもんは寺床てらとこめ目指めして登のぼって行き、

やっとの思おもいで一本杉いつほんすぎのそばあんの庵てら（お寺）つにたどり着つきました。

「“金かね壺”つぼ”はどどこにあってじやろかい。」

とあちこち探さがし回まわりましたが、なかなか見みつかりません。



「庵の裏の縁の下あたりにある。」

と聞いていたことを思い出し、そこへ行って見ると、そこには壺がすっぽり
抜けた跡だけが残っていました。

「あいや、誰か先に取ったばい。」

と悔しがり“金ん壺”を見つけたことが出来なかった助ノ十と安衛門は、
うな垂れて村里に帰って来たと言っています。

それ以来、寺床のお坊さんと野狐使いの祈禱師は二度と姿を見ることは
ありませんでした。

さんしろうきつね

三四郎狐

むかしむかし　うら　おおたに　やまおく　さんしろう　な
昔々、浦の大谷の山奥に「三四郎」という名の

しろきつね　す　い
白狐が棲んで居たそうである。

しろきつね　しょうじき　むらびと　こま　ひと　たす
その白狐は、正直な村人や困った人を助けていたので、
むら　ひと　すく　かみさま　だいじ　はなし
村の人から「救いの神様」として大事にされたというお話。

さんしろうきつね　にほん　しんこく　げんざい　ちゆうごく　にほん　あいだ　せんそう
三四郎狐は、日本と清国（現在の中国）、日本とロシアとの間に戦争が



起きたとき、兵隊の姿に身を変えて出陣し、沢山の戦いに連戦連勝した。

なが つづ せんそう にほんぐん だいしやうり お さんしろうきつね げんき そこく
長く続いた戦争も日本軍の大勝利に終わり、三四郎狐も元気いっぱい祖国
にほん がいせん
日本に凱旋することになった。

うみ わた やま こ じぶん す な ふるさと かえ せんじやう
海を渡り、山を越えて自分の住み慣れた故郷へ帰るのだが、戦場ではいかな
たたか おそ さんしろうきつね くうふく か でき
る戦いも恐れなかった三四郎狐も空腹には勝つことが出来ない。

くうふく ある でき さんしろうきつね かんが ぬ
空腹でまともに歩くことも出来なくなった三四郎狐は、いろいろ考え抜いた
すえ ろうば す いっけん いえ たず はん あた
末に、老婆が住んでいる一軒の家を訪ねてご飯を与えてくれるようねんごろに
たの 頼んだ。

ろうば ニじろよ はん た
老婆が 快くご飯を食べさせてくれたので、空腹を
み でき はら ちそう
満たすことは出来たが、腹いっぱいご馳走になったため、
きゆう ニじろ ゆる われ わす ふか ねむ お
急に心が緩み我を忘れて深い眠りに落ちてしまった。

ふか ねむ さ さんしろうきつね
しばらくたって深い眠りから覚めた三四郎狐が

き じぶん きつね しよつたい
気がかりだったのは、自分が狐であるという正体であった。
ふか ねむ もと すがた しんぱい
深い眠りのため、元の姿にもどったのではないか心配であった。

さんしろうきつね ろうば しよつたい みやぶ
三四郎狐は、老婆に正体を見破られてはいないだろうかという
ふあん ねん ろうば たず
不安の念にかられながら老婆に尋ねてみた。



「お婆さん、私の正体を見たでしょう。」

老婆は、三四郎狐の姿に驚いたが冷静を装いながら

「見たでもなし、見んでもなし。」と言った。

三四郎狐は、何か含みのある老婆の答えに一層不安を感じ言った。

「お婆さん、あなたが三日間だけ私の事を人に話さなかったら、

私はあなたが一生食べるだけの食べ物を与えましょう。これはほんの

印です、受け取ってください。」

三四郎狐は綸子の羽織一枚を差し出した。老婆は喜んで、早速綸子の

はおり
いちばんおく
羽織をタンスの一番奥にしまっておいた。

よくじつ
ろうば
さくじつ
できごと
むら
ひとびと
じまん
はな
まわ
翌日になって老婆は、昨日の出来事を村の人々に自慢げに話して回った。

あと
ろうば
き
さんしろうきつね
みっかかん
やくそく
ろうば
その後、老婆がふと気づいたのは三四郎狐との三日間の約束であった。老婆

いそ
わ
や
かえ
あ
りんず
はおり
な
は急いで我が家に帰ってタンスを開けてみたが、そこには綸子の羽織は無くなって

ろうば
じだんだ
ふ
くや
あと
まつ
いた。老婆は、地団太を踏んで悔しがったが、すでに後の祭りであった。

こと
だれ
い
さんしろうきつね
な
むらじゆう
その事があってから、誰が言うこともなく三四郎狐の名は村中はもちろん、

きんじうきんぎい
うわざ
近郷近在の噂にのぼってしまった。

いらい
ちく
さんしろうきつね
とち
まも
かみさま
たいせつ
まつ
以来この地区では三四郎狐を土地の護り神様として大切にお祀りした。

戦争せんそうのため出征しゅつせいする軍人ぐんじんはもちろん、兵隊へいたいとして新あたしく入隊にゅうたいする男子だんし、就職しゅうしょくする人ひとにいたるまで、三四郎神社さんしろうじんじやの長久ちようきゆうと繁栄はんえいを祈いのる習わしならがあつた。

また、ある時ときは三四郎狐さんしろうきつねの怒いかりに触ふれたため、原因げんいんの解わからない熱病ねつびようにかかりきくるひとひとがあつたと言いわれている。

それから、三四郎神社さんしろうじんじやの前まえに立たてられた幟のぼりは、正一位しょういちい稻荷大明神いなりだいみょうじんと大書たいしょされた赤色あかいろの旗はたであつたそうである。

はんべえ

半兵衛どん

昔々、浦の「猿の銭」という所に、ものすごく頭の良い半兵衛どんという
若者が住んでいました。

半兵衛どんのところには、毎日のように村人が、村のまつりごとや自分たちの
困ったことなどをよく相談に来ていました。

半兵衛どんは村の色々な出来事を良く知っていました。どんなに難しい事でも
も気持よく聞いてやり、丁寧に優しく教えていたので、村人は「半兵衛どん、

はんべえ はんべえ い い かみさま そんけい
半兵衛どん」と言つて、生き神様のよう^いに尊敬^{かみさま}して^いいました。

「猿の銭」とい^{さる}う所^{ぜに}の隣^{ところ}の地区^{となり}に、日ごろ半兵衛どん^{ちく}が村人^ひから尊敬^{はんべえ}されて^{むらびと}い^{そんけい}る事^{こと}を嫉^{ねた}んで^{すけた}いる助太^{はんごろう}と半五郎^{ひょうばん}とい^ようあま^{わかもの}り評^す判^{ひょうばん}の良^よくない若^{わかもの}者^すが住^すんで^すいま^すした。

ふたり ふたり しごと りゆう むらびと
二人^{ふたり}は、ふだん^{しごと}あま^りり仕事^{しごと}も^{りゆう}し^{ない}で、理^{りゆう}由^もな^く村^{むらびと}人^をを^いじ^めて^いた^ので^た、大^{たい}変^{へん}嫌^{きら}わ^れて^いま^した。

むらびと むらびと ものごと そうだん じぶん としした はんべえ
村人^{むらびと}が、い^{ものごと}つも物^{そうだん}事^{じぶん}の相^{じぶん}談^をを^{自分}分^{たち}た^ちち^{より}ず^つと年^{とし}下^{した}の半^{はん}兵^{べえ}衛^えど^んに^する^ので、
ふたり ふたり はんべえ おも こ おも きかい ねら
この二人^{ふたり}は半^{はん}兵^{べえ}衛^えど^んを^いつ^か思^{おも}い^つき^り懲^こら^しめ^てや^らう^と思^{おも}つ^て機^き会^{かい}を^ね狙^らつ

ていました。

ある嵐あらしの晩ばんに助太すけたと半五郎はんごろうは、半兵衛はんべえどんが

ぐっすり寝ね込んだところを急きゆうに襲おそいかかり

持もっていた荒縄あらのなわで縛しばり上げ、亀石かめいしの海岸かいがんまで担かついで

行き海い うみに投げな込んでしまいました。

半兵衛はんべえどんは、どうすることもできずもがき苦くる

しみながら、二人ふたりに助けたすを求めもとましたが、助けたするどころか、さらに頭あたまから海うみの底そこ

まで押しお込んで、急いそいで帰かえってしまいました。



その後、夜更けになると毎晩のように

「猿の銭」の半兵衛どんが住んでいた家から悲しい声が聞こえてきました。

「助けてくれー、助けてくれー。」

村人はたいへん怖がって、「猿の銭」という所を避けて通るようになりしました。

間もなく半兵衛どんの家の前に、誰ともなく綺麗な花が供えられるようになりました。それからしばらくすると、悲しい声はぱったり聞こえなくなったそうです。

悲しい声が聞こえなくなると、助太と半五郎は原因の解らない病気にかかり

なが あいだ くる
長い間もがき苦しみましたむらびと だれひとり たすが、村人は誰一人として助けてくれる者がものい
なかつたので、二人はとうとう同じ頃死んでしまいました。

むらびと すけた はんごろう げんいん わか やまい
村人は、助太と半五郎が原因の解らない病にかかって死んだことを、

すけた はんごろう はんべえ たた
「助太と半五郎は半兵衛どんの崇りじや」

い むらじゆう うわざ
と言って村中の噂いになったそうです。

※この話は昔々の物語ですが、理由もなく正しい人を懲らしめるようなことは本当に悲しいことです。

『岩本 茂氏(故人)聞き書 広報くらたけ掲載』

あらひら

ふじ こ

荒平どんと藤の子どん

浦うらの干拓事業かんたくじぎょうがまだ実施じっしされていない頃ころの事ことである。

地形ちけいも元浦もとうら小学校下付近しょうがうしたふきんが海うみであつたと推測すいそくされる。

当時とうじ、勢力せいりょくを誇ほこつた荒平どんと藤の子どんふじ こがいて、荒平どんあらひらは

平家へいけの落武者おちむしや、藤の子どんふじ こは源氏げんじの討伐隊とうぼつたいという関係かんけいから、

藤の子どんふじ この方が勢力ほつ せいりょくがあつた。

かいさんぶつ　さいしゅ　あ
海産物の採取に当たっては、川を下り海に至る道すがら、

どうしても藤の子どん宅の前を通らなければならず、

そのため荒平どんは、度々藤の子どんに

矢を射掛けられたため、浜へ行く折、

※1　浜道を通り、

藤の子どんの裏山を抜け、

※2　折口から

海へ入り、海の獲物を捕り帰ったと言いつた。



げんざい うらかわ
現在も、浦川には

ふじ こ あらひら い やおいわ のこ
藤の子どもが荒平どんを射たという矢追岩も残っている。

あらひら ちからも
また、荒平どんは力持ちであったため、

ひご よこてごろう ちからくら
肥後の横手五郎と力比べをするために、

ちからだめ おお いわ のこ
力試しをした大きな岩も残っていたそうである。

げんざい たけもと ふじこしたく やじょう
※1 浜道：現在の岳本 不二子氏宅の屋号

げんざい ひら すえこしたく やじょう
※2 折口：現在の平 末子氏宅の屋号



※荒平地区に伝わる荒平公の塚が実在している。

うらしんでん ひとばしらでんせつ

浦新田の人柱伝説

寛政元年（一七八九年）の頃は、浦村は入り海で小さな村であった。

寛政二年（一七九〇年）頃から村人の貧困を救うために浦新田の干拓事業が

許可され十年計画で始められた。

計画最後の年、文化元年（一八〇四年）最後の工事である汐止めが何度試みても成功しないため、人柱を立てて天神地祀に祈ろうということになった。

「誰に白羽の矢を……」

むらびと だま こ
村人は黙り込んでしまった。しばらくして一人の男（仮に作兵衛とする）が口を
ひらいた。

あす
「明日、よこぶせの肩あてをした着物をまとっている男を……」
かくして衆議は一決した。

よくじつ かた きもの み つ こうさつば けいじば とお ある ひとり おとこ
翌日、肩あての着物を身に着け高札場（掲示場）の通りを歩いている一人の男
うし すがた むらびと お ふ かえ おとこ だれ さくべえ ひと
の後ろ姿を村人は追った。振り返った男は、誰であろう作兵衛その人であった。

おどろ むらびと
驚く村人……

さくべえ みずか しらは や ひょうてき じゅうよう いつそんみんふく ひとばしら
作兵衛は自ら白羽の矢の標的となり、従容として一村民福のため人柱に
立ったのである。

いらい さくべえ じぞうさま まつ
以来、作兵衛は地藏様に祀られ、

あた きもの かた
この辺りでは、着物の肩によ「ぶせをあてる

ふうしゅう
風習がなくなった。

これは、今では表面が完全舗装された自動車道路となっている、鶴舞来石橋から引地地区の南北に連なる締切堤防北側の丘陵に新地守護仏として地藏様を祀っている。その地藏様には、人柱になった浦の義人を祀ったという話である。(元倉岳中教頭 井手尾 喬氏(故人)採録)

もつとも真偽のほどは不明である。後世の村人が、稔り豊かな干拓新田を残してくれた先祖の恩恵に感謝し、その苦労を偲ぶ情が“人柱伝説”を生んだのだと採録者も分析している。なお、「人柱は工事犠牲者を伝説化したのではないか」と解釈する説もある。人柱伝説は、栖本のイゲ神様にも伝承されている。

以上、有明町郷土史家 北野典夫氏(故人)、天草建設業協会発行「天草建設文化史」から



資料

おふとどんの置き土産

浦村におふとどんと言う男が居た。このおふとどんが教良木村に家なわり(轉住)する時に、村の人たちが願を言いました。

「お前が行くのは惜しうしてならんで、何か後まで話の種になることたる物は置いて行ってくれ。」

するとおふとどんは両足を岩の上に乗せ、それから二町ばかり先に膝を着いて座つたら、岩に跡が残つた。その時、おふとどんは「う言い残した。」

「俺は、何も無いから薬ばやる。」

それから、村の人が腹の痛い時は、その穴の窪みに溜まつた土を取って腹に塗り、また頭の痛い時は、頭に抹るとすぐに良くなると言う話である。

今でも、この話しの通り実行していらっしやる方もおり、昔は雨の後などは先を争って壺など携えて取りに行ったということである。

金ん主

浦村名桐の橋の本と言う所に石の眼鏡橋があつた。

その付近は、杉や松の茂みで夜など一寸気味が悪い。大晦日の真夜中にそこに行くと、金ん主と言うのが立っていたそうである。武士の様な姿をしていたと言う。

その金ん主と力競べをして勝てば大金持ちになるとの言い伝えが残っている。

天草島民俗誌 濱田隆一 郷土研究社 昭和七年六月から